

詩時評

第43回

今を見つめ直す

松本衆司

今年は節目の年だった。戦後八十年、御巢鷹から四十年、阪神淡路大震災から、地下鉄サリン事件から三十年。インターネット元年から三十年という記事もあった。様々な周年報道により私たちは改めて過去と向き合い、今を見つめ直す。折しも、添田馨著『いきつく果ての護憲』（言視社）を読む。そこには日本国憲法の前文や第九条に込められた真の思想と精神が綴られてあった。こよなく平和を希求する同世代の詩人批評家の言葉は深く尊いものだった。私は折に触れて丸山真男の『日本の思想』の条を思い出す。「自由は置物のようにそこにあるのではなく、現実の行使によってだけ守られる、いいかえれば日々自由になろうとすることによって、はじめて自由であり得る」、その主張は自由のみなら

ず、主権も民主主義も同じだとし、それは憲法第十二条に通底すると云う。「この憲法が国民に保障する自由及び権利は、国民の不断の努力によってこれを保持しなければならぬ」と。この言葉を戒めとしたい。「……生れ、婚姻し、子を生み、育て、老いたる無数のひとたちを畏れよう。あのひとたちの貧しい食卓。暗い信仰。生活や嫉妬やの争ひ。呑気な息子の鼻歌……。／そんな夕ぐれにどうか幸ひがあつてくれるように……。／それから学者やおあつらへ向きの芸術家や賑やかで饒舌な権威者たちどうかこんな寂かな夕ぐれだけは君達の胸くその悪いお喋言をやめてくれるように……」これは吉本隆明「夕ぐれと夜の独白」の条。私たちの守るべき暮らしだ。

伊藤芳博詩集『星を拾う』（思潮社）を読む。「潮汐」を引く。

潮の満ち引きのように／少女になったり老女になったり／からだに寄せては返すあの日とあの人が／へそのあたりで風いで／伸びてくる 退いていく／はだの静寂／つまさきからあたまでつぺんへ／めがしらからくしどころへ／ここが熱くなったときもあった／濡れたときも／乾いてしまったときも／あった ある あるだろう／あああい／ いい／しわのように刻まれ

ていく声／声のように広がっていく紋／浮き沈みしながら揺蕩うところは／むねからみぞおちへ／ぐらり ぐるり／ぐるる／未空に向かつて／やわらかに隆起しようとしているにゆうほう／なつかしい風に棚引く白いものあるちも／こころは行きつくところなくからだに戻ってくる／いきできた 生きている 生きていく／愉悅も鳴咽も／行くところすべて来るところ／ひふに覆われたところのかたまり／そこから底へ／てっぺんから天辺へ／いのちは満ちてくるのだろうか／こころは退いていくのだろうか

「潮の満ち引きのように／少女になったり老女になったり」、ひとりの命の存在として過去も未来も現在もなく、あるのは生きて来た「はだ」と「こころ」の全ての所作として思い出を紡ぎ、今を生き、躊躇い、漂い、愛を確かめる。その老いに向かう寄る辺ない人間の「今」を詩人は「潮汐」と洒落て描く。命の尊さと言葉を知る詩人の写生の力だ。

沢田敏子詩集『祝祭の種』（書肆子午線）を読む。「祝祭の種 1 祝祭の種」を引く。

緑日の灯が 崖を転がり落ち／カラン、カラン と哄笑しながら／闇に消えていった

日々／に耐えて時を超えていく。共に生き抜く
うとする市井の人々の人間愛の尊さを思う。
書肆子午線の装丁と沢田敏子の巧みな詩語に
魅せられる一冊だ。

西田牧子詩集『シンデレラのドレス』（詩
遊社）から「お天道さまの思し召し」を引く。

明治生まれの祖母は／朝になるとお日さま
に向かって／手を合わせていた／静かに、
そっと／私の知っている祖母は／とても
気丈で／頼もしい人だった／母が逝ってか
ら／面倒を見てくれていたせいか／何を相
談しても／大抵のことに／満足のいく答え
が／返ってきた／／そんな祖母が／よく口
にしていた言葉が／「お天道さまの思し召
し」／祖母は／私の母を含めて／三人の娘
たち全てに／先立たれていた／私の知らない
祖母の／そんな人生を／言い含めている
言葉なのだろうか／いいことも／上手くい
かないことも／諦念ではなく／何か大いなる
ものの力に／身を委ねていたのだろうか
／／祖母が亡くなって／四半世紀／何かに
ついて／空を見上げることが／多くなっ
てきた

「大道芸人」の家族、「テキ屋さんの夫婦」、
「玉蜀黍や烏賊を焼く親の服の端をぎゅつと
つかんで育った女の子」……、みな、手に職
や芸を持ち、夢を抱き、明日を想い、辛苦の

／昼下がりの裏町の 古池のような空き地
で／大道芸人はいつも独りを演じていたけ
ど／さりげなく道具を受け渡していた女の
人や／ふたりの間合いを見つめていた男の
子や／独りを演じる者の影には いつも／
そうした者たちがいた／大道芸が終わると
すばやく／投げ銭の箱を両手に捧げ 見物
人のあいだを／踊るように回って歩いた男
の子の姿が／まなかに残る／あの家族は
どこにいるだろう／／ひとすじのかわのう
に続く出店の列／フランクフルトとクレ
ープを／それぞれ 隣り合わせのテントで商
っていた／テキ屋さんの夫婦はどこにいる
だろう／香ばしい玉蜀黍や烏賊を焼く／テ
ントの中で／親の服の端をぎゅつとつかん
で育った女の子は／見かけるたびに上背が
伸びていた／けれど ほんとうに／香ばし
い匂いはどこにあるのだろう／／雨が降る
感染症の／雨が降る 白リン弾の／雨が／
降り続くので／／祝祭が吞み込まれていっ
た／濁流 逆巻く／人間の川に／大道芸人
の家族は国境を超えられただろうか／／祝
祭の種は運ばれただろうか

うか。顧みて、娘を亡くした祖母の悲しみは
……、しかも娘を三人ともとは。そのせつな
く痛々しい人生を生きた祖母の只管の祈りを
込めた言葉。その言葉に導かれてこの詩集は
ある。西田牧子が愛した家族の肖像、その像
の向こうに愛された少女「牧子」がいる。

おのうえ・きみよ詩集『百合の花―私の戦
中・戦後を紡ぐ』（ドットウイザード）を読む。
「しじみ」を引く。

戦後一年、小学生になった私／六歳上の次
兄と一緒にナンチン電車で浜寺海水浴に行
った／砂浜には沢山の人が来ていた／みん
な砂浜で座ったり寝転んでいた／今みたい
にビーチパラソルは あまりなかった／砂
浜でしじみが多く採れた／私も足で砂を掘
って探す／兄は袋いっぱい しじみを採っ
た／帰る電車は満員だった／家に帰る途中
私が手にぶら下げていた／しじみの袋を落
としてしまった／叱られると思った／優し
い兄なので／「仕方ないなあー」と言った
／私は家でしじみが食べられなくなったの
が／凄く悲しかった

おのうえさんは昭和十五年の生まれ、五年
前八十歳の折から四年間大阪文学学校に通わ
れ、自身の戦中戦後の思い出を綴られた。家

族に守られながらも、大阪大空襲など様々な辛苦に満ちた経験をする。その一つ一つを記憶の底から掘り出し書きとめた詩集である。それは無論、貴重な時代の証言でもある。

都圭晴詩集『ひかりさくかえりみち』（七月堂）を読む。「二日」を引く。

あるがまだだった／落ちてきた 吸い込まれ
そんな空の／そして この朝の眩しさを
／僕はいつか 思い出せなくなるのだろうか
か／葉の上に転がる 透明な雫や／誰もが行き先を知らないでいる／空までの 美しい余白のようなもの／それは 光から始まり
そして溢れ／天でさえ 掴み損ねてしまふもの／ああ／いつのまにか 心をどこかに置いてきて／まだどこかへ駆け出してしまった／気持ち そんな／手の届かない流れていく光の跡／母は今日／左脚に金属を埋める手術をする／これで 両脚に入れることとなる／ステージ4の 乳癌で苦しんだこともあった／／網膜に焼き付けた朝陽が／紫の跡となり／行き先の知れぬ一日に／万華鏡の満ち欠けのように溺れていく

詩集の末尾にある高田文月の添書き「行方不明のやさしさ、のゆくえ」を読むと、都圭

晴の「やさしさ」が見える。この詩もそうだ。彼には「網膜に焼き付けた朝陽」までも愛おしい。「僕はいつか 思い出せなくなるのだろうか」そのことがせつないのだ。だが、生きていることが何かは「母」の人生に寄り添うことで知っている。だからこそ一層、この「一日」に「溺れていく」のだ。

飯山りの詩集『そよ風とお茶の時間』（詩遊社）を読む。「雨の日だからこそ」を引く。

朝から／土砂降りだった／こんな日だから
こそと／母を訪ねた／案の定／部屋にいた母は／雨雲同様に／うつとういしい気分を／充滿させていた／たわいもない話をして／いつもより元気な声を出して／母の肩を柔らかに抱いて／ついでに一声／ヨッシャー／自分も活を入れ直して／母の部屋を出た／／雨は小降りになっていた／夕空の端には／晴れ間が／見えていた

病に倒れ、介護施設に預けた母を幾度も訪ね、母との時間を大切に思う娘の詩である。幾つもの乗り越えるべき人生の課題や葛藤を経て、母と娘の心の波長にはなだらかに重なり合う心地よさがある。故に詩集のタイトルも素敵なのだ。それは母を見送るまでの二人のいい時間。

亀谷健樹詩集『遺跡』（コールサック社）を読む。四五篇の詩を収めた詩集は三章に分かれるが、第二章「みちのくの昔と今」から「じよやのかね」を引く。

としのせ／ひやくやつつの／むへんにひろがる／／こんとんをつく／／かんのんをつく／／やしやをつく／／しにたいをつく／／いきねばならぬをつく／／さんずのかわをつく／／えんまのかがみをつく／／あうしゅういつつをつく／／ぱれすちな・がざをつく／／くものいとをつく／／いくさのな いせかいをつく／／かねのね／せかいのおとしあなに／むげんの／かざばなとちり／／わずかに／ひかった

「若い時から『禅の詩』を標榜してきた」と、九六歳の老詩人は言う。その詩には、心から心へ、祈り願う言葉が綴られる。禅僧の求める「無相の自己」が見つめる世俗の「こんとん」を真実の心で「つく」言葉なのだ。そして、それは生きるそこそこに安心立命の光を灯す言葉なのだ。

富上芳秀著『詩的現代』の時代』（詩遊叢書44・詩遊社）を読む。高村光太郎・萩原朔太郎・田中冬二・堀川正美・寺山修司・林

美佐子・高見順・荒川洋治・伊藤整・上田敏・中野重治・茨木のり子・鮎川信夫・秋山清・堀口大學・田村隆一等の詩や詩人への論考を中心に三十一篇の詩論、エッセイが収められている。中には、彼の青春の思い出や出来事も綴られており、興味深く頁を繰った。

「後記」で、富士芳秀は「私には、現代は詩が根底にあり、詩によって成り立つ世界であるという美しい願望があった。だから、これらの文章は、その詩的なもの世界そのものを追究するという私の願望の表れでもあるという意味でこの本につけたタイトルであった。もちろん、詩などというものにうつつを抜かしてきた自分に対する苦いイロニーを含んだものでもある」と述べる。人生をかけて只管打ち込んできた詩に手向ける彼の情熱や誠実な思いが伝わる一冊である。そのエッセイ群の中から「青く冷たい空気」と「軽み」について」の第四、五段落の条を引く。

『トマト』を出した頃、詩とは何かと問われたとき、「詩とはボエジーを持つものである」と私は答えたものである。それではボエジーとは何か、という問いに対して「ボエジーとはその詩作品が持つ青く冷たい空気のことである」とその当時は考えていた。私が散文詩を今も書き続けているのは、この「青く冷たい空気」を読者に向か

って伝えるために書いているのである。

(：略：) その「青く冷たい空気」を作品から感じることでのみ私は死の恐怖から逃れることができるのである。詩は言葉の意味を伝えるのではない。私は物語ること世界の意味を読み解き、伝えるのではなく、言葉のリズムや匂いによって、「青く冷たい空気」を感じさせるのである。音楽と同じように感じさせるだけである。理解させるのではなく、感じさせることが目的ならば、小説ではなく詩でなければならぬ。

「青く冷たい空気」を作者と読者が共有する世界が詩なのである。／ところが、最近の私はこの「青く冷たい空気」以外にも詩が存在することに気がついた。それは行分け詩を書くようになったことと無関係ではない。言葉そのものに對する興味とは「軽み」である。芭蕉が晩年の境地に達したものは「軽み」である。「わび」「さび」という境地から「軽み」にたどり着いたのである。あるいは晩年の西脇順三郎がよく口にした「諧謔」という言葉があった。そうした偉大な詩人たちに自らをなぞらえることは不遜のそしりを受けることになるかもしれないが、「軽み」ということに非常な興味を持つようになったのである。

(「詩的現代」第五号・特集・私が詩を書くとき／二〇一三年六月三日刊)

この度、長年多くの人々の実作指導してきた大阪文学学校を、富士さんは退くこととなった。彼とは詩文学の仕事をも多く共にした。同人詩誌『第五子』編集発行(八七年・九〇年)、大阪文学学校の月刊(当時)だった機関文芸誌『樹林』編集(九〇年・九一年)、同人詩誌『アイアイ』編集発行(九〇年・九四年)などだ。とりわけ大変だったのは『樹林』の編集だった。彼は比較的時間に余裕のある公立定時制高校教員で、私はミッシェンの中高一貫男子校の教員だった。富士さんは定時制の業務を終えた夜の十時半頃に電話をかけてくる。無論、編集に関わる必要な時だけのことだが、必ず九十分の長電話だった。当時、私は西宮在住で、勤務校は大阪天王寺にあり、朝六時に起きて出勤する私には厳しい時間だった。彼はその電話で『樹林』の企画・編集の問題点を指摘し、そのことに關して私の意見を求める。私がなかなか返答できないでいると、一層彼は声を高くし、持論を展開するのだった。今でもその声がありありと甦る。彼の文学に寄せるその熱意は今も主宰する「詩遊」に生かされている。長年、私は秘かに(東のA、西のT)と、敬意をこめて呼んでいる詩人がいるが、その(T)とは富士芳秀のことである。